教材活用例（3）「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」

〔小学校高学年　主題：郷土愛　内容項目：４の（７）〕

（１）開発資料の実際

ア　素材の説明

（ア）素材の概要

〈素材―和田吉左衛門―について〉

和田吉左衛門は，大竹及びその周辺を治める庄屋である。大竹をおそった大洪水により，小方村は大きな被害を受ける。吉左衛門は，小方村を取り戻そうと，干拓工事をすることを決意し，工事に必要な費用を私財を売ったり，借金をしたりしてまで準備する。そして，干拓工事は開始されるが，途中，台風により，干拓工事が台無しになってしまう。しかし吉左衛門の村を思う気持ちは揺らぐことなく，嘉永５(1852)年に干拓工事は無事終了した。

文政元年(1818年)	小方村に出生。
天保７年(1836年)	小方村庄屋に任ぜられる。
弘化2年(1845年)	洪水が起きる。新町沖干拓工事の開始。
嘉永5年(1852年)	新町沖干拓工事の終了。
嘉永６年	割庄屋に任ぜられる。
安政6年(1859年)	コレラ流行。コレラ患者の救済に尽力。
慶応6年(1870年)	第二次防長の役。罹災民救助に尽力。
明治17年(1885年)	逝去(67歳)。
明治19年	楓園和田翁の碑，建立。

和田吉左衛門の経歴

（イ）４コマ絵

新町沖新開干拓工事を中心に，和田吉左衛門の一生を史実に基づいて整理した。吉左衛門の小方村を思う気持ちが最も強く表れている場面を中心場面とし，起承転結で構成した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	和田吉左衛門は文政元(1818)年，小方村に生まれた。自然に囲まれた小方村で友達と遊んだり，村人と楽しくかかわったりしながら，すくすくと育っていった。	吉左衛門が27歳になった時，小方村が洪水に襲われ，二度と生活できなくなるほどの大きな被害を受ける。吉左衛門は，小方村を取り戻そうと，干拓工事をすることを思いつき，私財を売ったり，借金をしたりしてまで，干拓工事に必要な費用を準備する。こうして干拓工事が開始される。	干拓工事開始から１年後。再び大きな台風が大竹をおそった。この台風により，干拓工事は台無しになってしまう。工事を再開するか，中止するかで頭を抱え込んでしまう吉左衛門であったが，小方村を取り戻したいという思いから，工事を再開することを決意する。	干拓工事が無事終了した。村人たちは，干拓工事をした場所へと移り住み，いつまでも幸せにくらした。そして，150年以上たった今でも，この土地の上で，私たちの生活が営まれている。

イ　資料の解説

【作成の要点】

児童が，普段何気なく過ごしている小学校生活。その生活が，実は和田吉左衛門たちの小方を思う気持ちによって支えられ，その恩恵を受けているということ，そして，毎日通っている小学校の前にある石碑が，実は吉左衛門への感謝の気持ちをこめて村人たちによって建てられた石碑であるということ，これらの事実を知らない児童が多い。そこで，身近であるが，児童が知らないこれらの事実を資料として取り上げ，児童にとって新たな発見，驚きのある資料，児童の生活と結びつける資料を意識しながら作成した。

児童の生活と結びつける資料を作成することで，地域の一員としての自覚を高めるとともに，あいさつ運動など，様々な活動へとつなげるきっかけとなる資料にすることを大切にした。

【心に響くちょっといいはなし】

和田吉左衛門は，西郷隆盛とも交流があった。そうした中で，西郷隆盛からその人柄を認められ，「ともに新しい日本のために尽くしてみないか。」と，誘われたが，和田吉左衛門は「私が生まれた大竹を大切にし，大竹のために尽くしたい。」と，その誘いを断った。和田吉左衛門は，その言葉通り，長州戦役で被災した人たちの救済に当たったり，コレラ患者の看病に命がけで携わったり，洪水の被害にあった小方村の村人たちのために干拓地を築いたりするなど，大竹のために尽力した。

ウ　資料全文

「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」

和田吉左衛門は，1818 年小方村に生まれた。とても優しく元気な子で，友達とよく野山や海や川で遊んでいた。また，村の誰からもかわいがられ，すくすくと育っていった。

ところが，吉左衛門が 27 才になったある日，大変なことが小方村に起きた。大竹に大雨がふり，大こう水が小方村をおそったのである。この大こう水によって，小方村のいい谷では全ての家が流されるなどのひ害にあい，また，田や畑は二度と作物を育てることさえできなくなってしまった。村人たちは，生活することができなくなり，とほうにくれていた。

吉左衛門は，かわりはてた小方村の様子を見て，なみだを流し，その場にたちすくんだ。

しかし，「何とかしなければ。」と思い，どうすればよいかと考えた末，海に新しく土地を作る「干拓」という方法を思いついた。干拓をして，新たな田や畑を作り，村人たちに分け与えることができれば，村人たちはいつまでも幸せにくらせると考えたのである。

しかし，干拓には，多くのひ用が必要である。けれども，今の小方村の様子では，村人からお金を集めることなどとうていできない。そこで，吉左衛門は，自分の家にある物を売ってお金にしたり，

借金をしたりしてまで，干拓に必ようなひ用を準びした。
　こうして，ついに干拓工事が始まった。この工事には，小方村の村人など，千人をこす人々が参加し，一生けん命に工事にはげんでいった。
　ところが，工事開始から一年たったある日，もうれつな台風が大竹をおそった。大雨がふり，強い風が吹きあれ，吉左衛門たちが干拓工事をしている場所に，海からの大きな波が，何度もおしよせた。吉左衛門や村人たちは，台風が通り過ぎるまでの間，心の底から工事の無事をねがうばかりであった・・・。
　次の日，ようやく台風が過ぎ去った。しかし，まだ風は強く，小雨が降り続いている。そんななか，吉左衛門や村人は，大急ぎで工事場所へと走った。そして次の瞬間，吉左衛門たちは
「あっ。」
と，声を上げ，その場にしゃがみこんでしまった。台風により，無ざんにもていぼうがこわされ，これまで一生けん命にがんばってきた工事が台無しになってしまっていたのである。
　吉左衛門は，うなだれ，頭を抱え込んだ。
「これまでの苦労は，一体何だったんだ。全てが台無しになってしまった…。ここで工事を中止にすべきなのだろうか，それとも工事を続けるべきなのだろうか。」
　そんな思いが，吉左衛門の頭の中をかけめぐる。その時，吉左衛門の耳に
「これでもう，小方村は，おしまいじゃ。」
と，力なくつぶやく村人の声が聞こえてきた。村人のつぶやきが吉左衛門の心の中で，何度も何度もこだまする。
　吉左衛門は，拳をぎゅっと強く握りしめた。
「私は，必ず，この工事を成功させるのだ。」
　こうして，干拓工事は，再開された。村人たちも，吉左衛門の思いにこたえようと，これまで以上に必死になってがんばった。
　そして，工事開始から，６年たった１８５２年。
　ついに吉左衛門や村人たちの思いがこめられた干拓工事が終了した。吉左衛門や小方村の人々は，その完成を手を取り合って喜んだ。
　その後，村人たちは新しくできた土地へと移り住み，いつまでも幸せにくらした。

　そして，吉左衛門がこの世を去ってから，150 年以上たった今も，私たちは吉左衛門や村人たちの気持ちがこもった土地の上でくらしている。
　私たちが，毎日のように勉強したり，友達と遊んだりしている小方小学校の土地も，実は，吉左衛門たちの手によってつくられたものである。
　吉左衛門がこの世を去ってから２年後，大竹に住む村人たちが，和田吉左衛門に感謝の気持ちを込めて石碑を建てた。
　これが，小方小学校の前にある「楓園和田翁之碑（ふうえんわだおうのひ）」である。

【参考文献】

わたしたちのまち大竹市　大竹市教育委員会

エ　授業展開例　ー学習指導案（略案）ー

吉左衛門の村に対する思いを中心にした展開
～　資料と現在の生活との結びつきを生かした指導　～

（ア）主題名　郷土愛　４－（７）

（イ）ねらい　人手も費用もかかった干拓工事が台風によって台無しになったにもかかわらず，工事の再開を決意した和田吉左衛門の気持ちを考えさせることにより，郷土を愛する心情を養う。

（ウ）資料名　「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」

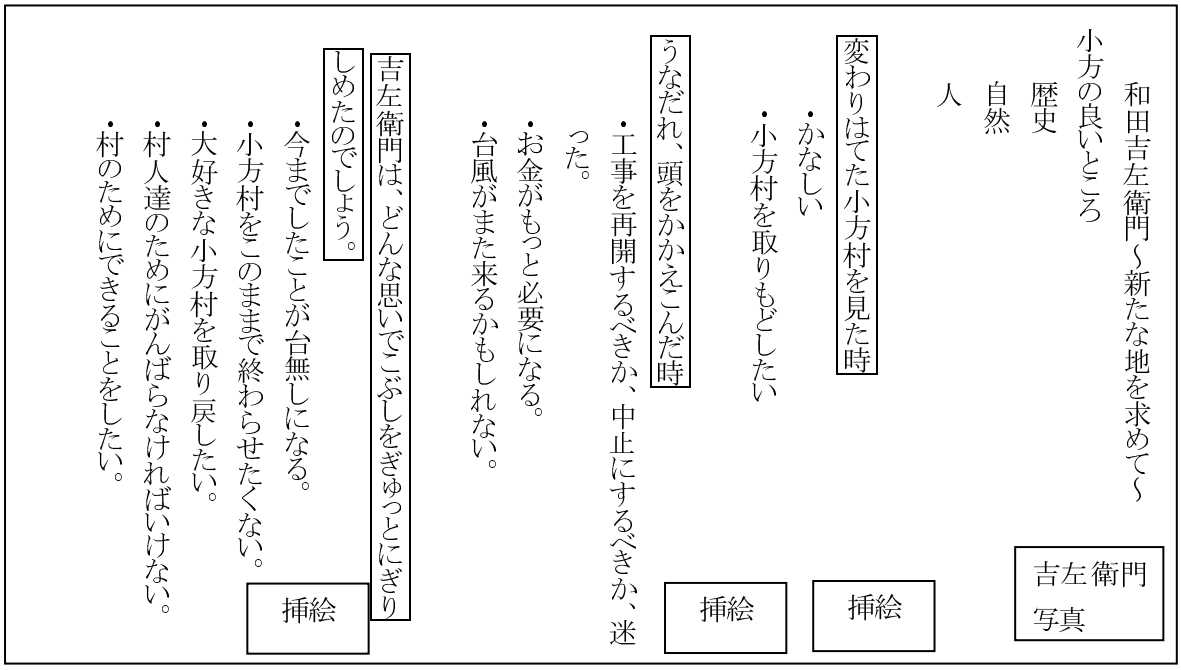
（エ）学習指導過程

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点 （☆評価の観点）
導入	１　アンケートの結果（地域の良い所）を知る。	○　地域に住んでいて良かったと思うことはありますか。	○　アンケートをもとに意図的に指名する。
展開	２　資料の前半を読んで話し合う。 ３　資料の後半を読む。	○　吉左衛門は，小方村のことをどう思っているのでしょうか。 ・自然がたくさんあっていい。 ・好き。 ○　変わり果てた小方村の様子を見た吉左衛門は，どんな気持ちだったでしょうか。 ・悲しい。 ・なんとかしなければならない。 ○　工事が台無しになった時，吉左衛門は，どう思ったでしょうか。 ・工事を再開するべきか，中止にするべきか，迷った。 ◎　吉左衛門は，どうして工事を続けることを決心したのでしょうか。 ・今までしたことが台無しになる。 ・小方村をこのまま終わらせたくない。 ・大好きな小方村を取り戻したい。 ・村人たちのためにがんばらなければいけない。 ・村のためにできることをしたい。 ・いつも見ていた石碑は，吉左衛門に感謝の気持ちを表すために村人たちが建てたものだったなんて，知らなかった。 ・吉左衛門たちのおかげで，今の小方小学校や小方があるのだな。	○　迷った理由を明確にする。 ○　工事を中止しようと思う気持ちに共感させる。 ○　自分の考えを書く時間を十分に確保することで，一人一人に自分の考えをもたせる。 ☆　導入を想起しながら，吉左衛門の小方村や村人を思う気持ちを自分とのかかわりでとらえることができたか。
終末	４　ゲストティーチャーのメッセージを知る。 ５　授業の感想を書く。	○　地域の方からの手紙が届いています。	○　ＢＧＭを流すことで，雰囲気作りをする。 ○　「地域」について考えさせる。

（オ）資料分析表

段階	語り手の行為・状態		主人公の状態（結果言語）	現象の事態の流れ
	中心人物（結果言語）	その他の人物（対人・関係）		
○小方村で生まれ育って	小方村に生まれ、育ち、村人に囲まれ、すくすく育って	言語聴覚士養成学校（実習）言語聴覚士をきっかけに関係する（村人）	小方村で生まれ育った言語聴覚士 ・小方村が好き ・友達と楽しく遊んで ・村の人たちと優しく	○言語聴覚士が、育ったこの小方村が好きなんだ
○故郷を求め水村	変わり果てた小方村や村人の様子を見て、愕然とし、小方村を救うべく新たな決意を固めるとともに、方法を思い	大洪水の後遺症により、共感するとともに、考えなくなった	変わり果てた小方村を見た言語聴覚士 ・本当にあの小方村を救いたい ・考えて、村の復興だったのに ・くやしい、小方村のあのような状態なんて、まったく ・何とかしなければ	○小方村が、大洪水の後遺症であったことに気づいたのが ○言語聴覚士が村人の、かわいそうだと思ったが ○言語聴覚士が村人が、この後、どうするのだろう
	財政問題や業務を無視する者に、怒りを覚えたり、悲しみを覚えたりする			
	言語聴覚士を開始する	言語聴覚士を知った		
○言語聴覚士として村人を救う	多職種が集まり、言語聴覚士の業務を開始する	多職種が集まり、言語聴覚士の業務を開始する		
	言語聴覚士の現場へ駆けつける	言語聴覚士の現場へ駆けつける	頭をかかえこんだ言語聴覚士 ・工事を続けるべきか、まだ、多職種が集まり、工事を開始しようとしているのを見て、工事を開始しようとしているのを見ると、 ・私たちを置いてけぼりにしたのだ、もう中止しようと	○やっぱり、言語聴覚士は、言語聴覚士の業務を無視するのだ、言語聴覚士を置いてけぼりにしたのだ、と思ったが
	言語聴覚士が多職種と共に、言語聴覚士の業務を知る	言語聴覚士が多職種と共に、言語聴覚士の業務を知る		○言語聴覚士が村人が、このままでは、このままでは、と思ったが
○悩みながら	言語聴覚士を続けるか、中止するかを迷う	「これからの、小方村が、もっとこうしなければ」と、ひらめく		○もし、工事を開始するとしたとしても、無理を多職種の事ばかりを、たくさんの人数を集めるとなると、 ○言語聴覚士が、工事を続けるのか、中止するのかが
	村人の、ひらめきから、中止か、何度も何度も、言語聴覚士が、工事を続けるべきか、迷う		工事を開始すること決心した言語聴覚士 ・小方村を救わなければならない、大切な小方村を救いたい ・これから、優しい、小方村の人たちが、ゆっくりとおだやかに ・ゆっくりとおだやかに、ゆっくりと、 ・自分が、小方村を救う	○言語聴覚士が、小方村のことを考えて、工事を開始したのが ○たくさんの、多職種が集まったのに、言語聴覚士が、すぐ、 ○言語聴覚士が、小方村のことを考えたから、小方村を救ったのが ○この後、工事が、どうなったのだろう
○工事が完成する	工事を開始する	工事を開始する		○ついに、工事が完成したのが
	工事の完成を村人と喜ぶ	工事の完成を言語聴覚士と喜ぶ 工事が、終わった		○村人達が、これから新しい生活に、ワクワクしたのが ○もっとこうしたい、理想の生活環境をこれからつくりたいと
	言語聴覚士として生活する	言語聴覚士と多職種の連携が、ますます、強固「連携強化」を進める		○言語聴覚士が村人が、工事が完了し、多職種が、言語聴覚士と、連携を、強固、強くなる連携をしようと、共感しあったのが ○小方の生活は、言語聴覚士が村人の、生活を、多職種の連携をしようとしたのが ○小方村のためにと、言語聴覚士と多職種の連携を、強くしたのが

（カ）板書例



【板書の構成】

板書では，資料の内容がイメージしやすいように資料提示の際に使用した挿絵を使用していく。特に，干拓工事が台無しになった場面と中心場面では，しっかりと児童の考えを板書するスペースを確保し，吉左衛門の思いについて，自分の考えを広げたり，深めたりするのに役立てていく。

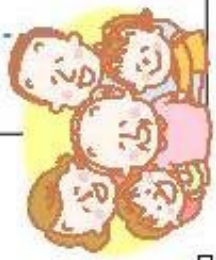
（キ）ワークシート

「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」

年　組（　　）

Ⅰ．吉左衛門は、どうして工事を続けることを決心したのでしょうか。

Ⅱ．授業を通して「地域」について考えたことを書きましょう。



Ⅲ．今日の授業をふり返って書きましょう。

○自分の考えをもつことができましたか。	◎	○	△
○友達の考えを聞くことができましたか。	◎	○	△
○自分の考えを深めることができましたか。	◎	○	△

（２）活用のポイント

本資料は，大竹市の先人「和田吉左衛門」を取り上げた資料である。そして，人手も費用もかかった干拓工事が台風によって台無しになったにもかかわらず，工事の再開を決意した吉左衛門の気持ちを考えさせることにより，郷土を愛する心情を養うことをねらいとしている。

吉左衛門は，小方村に生まれ育った。そして，吉左衛門が 27 歳になった時，大竹に大雨が降り，洪水の被害にあった小方村や村人たちを何とか救いたいと思い，干拓工事を開始する。その後，様々な困難にぶつかるが，それでも最後まで干拓工事を完成させる。現在，小方小学校が建っている土地も，吉左衛門たちが干拓工事をした場所の上に建っている。また，小方小学校の校門前に立っている石碑は，村人たちの和田吉左衛門への感謝の気持ちをこめて建立されている。

しかし，これらのことを知っている児童は少ない。こうしたことから，吉左衛門たち先人の努力が自分たちの生活に強く結びついていることを知る機会にするとともに，吉左衛門たちの地域を愛する思いやその恩恵を肌で感じさせることのできる資料の特性を生かした活用を考えた。

ア　発問の工夫

導入では，地域の良いところについてのアンケート結果を知ることで，本資料にでてくる地域の良さと現在の地域の良さのつながりを感じさせていく。

展開では，中心発問前に工事を中止にするか，再開するか，頭をかかえこんで悩んだ吉左衛門の思いに共感させていくことがポイントである。この場面は，この干拓工事を完成させるに当たり，吉左衛門が最も悩む場面である。小方村に生まれ育った吉左衛門は，干拓工事に必要な莫大な費用を家財道具を売ったり，借金をしたりしてまで準備した。そして，ようやく干拓工事を開始したのだが，工事開始一年後に台風が大竹を襲い，干拓工事が台無しになってしまう。工事を再開すると，費用がさらにかかるし，台風がまた来るかもしれない。また，村人たちもやる気を失っている。

こうしたなか，それでも，吉左衛門は村人たちのことを思い，干拓工事を再開させる。

この場面での吉左衛門の思いを中心発問「吉左衛門は，どうして工事を続けることを決心したのでしょうか。」と，児童に問うことにより，吉左衛門の郷土を強く思う気持ちへと迫ることができると考えた。

イ　生活との結びつき

吉左衛門の死後，村人たちが吉左衛門への感謝の気持ちをこめて，石碑を建立する。

この石碑は，小方小学校の近くに建立されているのだが，この石碑の意味を知っている児童は少ない。そこで，資料の後段においてこのことを記述する。

また，資料を範読する時には，資料の内容に合わせて，児童が小学校のグラウンドで遊んだり，学習したりしている写真や石碑の写真を視聴覚機器を活用して提示する。このことを通して，吉左衛門たちの小方村を思う気持ちがこもった土地の上で自分たちが生活していることに気付かせたり，吉左衛門の小方を思う気持ちに対する村人たちの感謝の気持ちにふれさせたりする。

これらのことを通して，児童に吉左衛門たちの功績や吉左衛門という大竹の先人を身近に感じさせることにつなげていく。

ウ　ゲストティーチャーの活用

終末では，「和田吉左衛門はすごい。」という感想で終わらせないために，児童にとって身近な登下校見守りボランティアの方からの手紙を教師が代読する。

手紙の内容は，登下校見守りボランティアの方の活動に対する思い，地域に対する思いなどを中心に取り上げることとする。その際，授業のねらいに即し，ゲストティーチャーと事前に綿密な連携を図っていく必要がある。

（３）授業の実際－児童生徒の反応を踏まえて－

ア　発問の工夫

導入では，地域のよさとして「お店」「自然」「人」に関する意見が出た。「自然」や「人」について

は，資料での小方村の様子と結びつけることができた。

中心発問「吉左衛門はどうして工事を続けることを決心したのでしょう。」に対しては，「村人のため」「恩返し」「村への思い」という観点から，児童は自分自身の地域への思いと対比させながら自分とのかかわりで考えを深めようとしていた。

振り返りにおいては，「小方は昔の人ががんばって作ってくれた宝だとわかった。」「地域のために何かできることをしたい。」「小方に生まれてよかった。」など，郷土愛にかかわる感想が多く出た。

授業実践を通しての課題は，大きく三点ある。

一点目は，「交流する時間の確保」である。そのために基本発問を三つから二つに変更する必要があると考えた。一つ目の基本発問は「変わり果てた小方村を見た時，吉左衛門はどんな気持ちだったでしょうか。」，二つ目の基本発問は「うなだれ，頭をかかえこんだ吉左衛門は，どんな気持ちだったでしょうか。」とする。

二点目は，「中心発問に対して，児童が自分の言葉で考えるようにすること」である。学習指導案にある中心発問をした場合，自分の言葉ではなく，資料中の言葉から考えている児童がいた。そこで，中心発問を「吉左衛門は，どんな思いで拳をぎゅっとにぎりしめたのでしょう。」とすることで，児童はより自分とのかかわりを通して自分の言葉で吉左衛門の思いを考えることができるようになると考えた。

三点目は「児童の思考を焦点化させること」である。そのため，中心発問に対する児童の考えに「費用」「恩返し」「村人のために」という観点からの切り返しをしていくことで，児童が何をどう考えていけばよいのか一層明確になると考えた。

イ　生活との結びつき

吉左衛門に対する感謝の気持ちがこもった石碑の写真や児童が小学校のグランドで遊んでいる写真を提示したり，資料の後半を読んだ時には，児童から「へぇ，知らんかったぁ。」「すごい。」など，新たな発見に，感嘆の声が上がった。

学習後には，石碑を見に行く児童や登下校中に石碑に礼をして通っていく児童の姿が見られた。

ウ　ゲストティーチャーの活用

地域のことや児童のことを思い，7 年間，一度も休まずに登下校ボランティアをしてくださっている地域の方からの思いがこもった手紙であったので，児童は一生懸命にその内容を聞いていた。

振り返りには，「〇〇さんからの手紙から思うことがありました。それは，私たちはいろいろな人たちから愛されているということです。わたしは，これからもっといい町にできるようにがんばりたいです。」など，地域の方に対する思いを書いた児童が多くいた。

（4）各教科等（体験活動を含む）との関連

社会科の歴史学習を通して，時代背景について理解させておくことで，資料についての理解をより深めることができる。

また，学習を通して，「地域のために何かできることをしたい。」という感想，「地域のためにがんばってくれている方に感謝したい。」という感想が多く出た。こうした思いが，総合的な学習の時間における学習発表会「和田吉左衛門物語」の発表に生かすことができた。また，地域の方への感謝の気持ちを伝える場を設定したり，地域のためにできることを考える中で，あいさつ運動をボランティアで取り組む活動へとつなげたりすることができた。

（5）心のノートの活用

事後指導において，「心のノート」PP.104-105 を活用することができる。

この授業を通して，地域を愛する心情を養った後，心のノートにある言葉にふれることにより，児童は「ふるさと」について見つめなおすことができる。また，ふるさとのために何が自分にできるのかを具体的に考えるきっかけにすることもできる。